日　時	令和 6（2024）年 9 月 24 日(火)
場　所	幸田町教育委員会
出席者 （敬称略）	幸田町新博物館建設検討委員会 　黒柳孝夫（愛知大学 名誉教授）　※委員長 　荒井信貴（名古屋大学 講師） 　神谷浩（徳川美術館 副館長） 　武村雅之（名古屋大学減災連携研究センター 特任教授） 　岩下英司（深溝小学校 校長） 　神尾義貴（町民代表） 　天野広子（町民代表） 　本多宣子（町民代表） 　池田和博（幸田町教育長） 　菅沼秀浩（幸田町教育部長） 幸田町教育委員会　文化スポーツ課 　夏目守雄（教育部次長兼文化スポーツ課長） 　神取龍生（文化スポーツ課課長補佐文化グループリーダー） 　志賀光浩（文化スポーツ課スポーツグループ特命専門員） 　石原憲人（文化スポーツ課文化グループ主査） 　稲垣彩乃（文化スポーツ課文化グループ学芸員） 株式会社　丹青社 　森富弘 　﨑山幸子 　久保はるか
目　的	第 2 回委員会

I. 開会挨拶

・ （委員長）全員にお集まりいただきありがたい。基本計画ということで、いろいろな立場や視点から、より魅力的な博物館にするために、具体的にどういう形にしていけばよいか、率直にご意見いただきたい。

1. 前回議事録について

・ （委員長）特に意見がないため、確認は以上とする。

II. 幸田町新博物館基本計画について

2. 「第１章　基本的な考え方　２．基本構想の概要」について

・ （委員長）「（３）施設の建設予定地」について、「町民会館、図書館等の文化施設が設置されるハッピネス・ヒル・幸田を建設予定地とする。」でよい。

3. 「第１章　基本的な考え方」３．基本理念について

・ （委員）言葉はきれいだが、もう少し狙いが分かるようにしていただきたい。「①みんなで発見する博物館」と「②みんなが交流する博物館」のが示す「みんな」の意味は異なるだろう。
・ （委員）「③ともに成長する博物館」の「ともに」はどう考えるべきか。町民目線で積極的に関われるような話を追加できればよい。市民参加についての方向性は考えどころだろう。

4. 「第２章　事業活動計画」全体について

・（委員）もう少しすっきりさせたほうが良い。たとえば、「③資料の保存・管理」に「寄託資料は、データベース等を用いて受け入れ処理を行い、収蔵庫内の保管場所を明確にして管理する。」とあるが、寄託資料に限らず、すべての資料に当てはまることだ。寄託資料に限定して言及する必要はない。

5. 「第２章　事業活動計画」３．展示について

・（委員）「展示の解説」に多言語に配慮した文言があるが、博物館に行くと、大人でも読めない日本語の解説があることが多いと感じている。日本語についても、小学校５年生程度の子どもが読めるようにフリガナをつける等の配慮をお願いしたい。
・（委員）情報端末を備えるのではなく、スマートフォンを持っていることを前提に考えていけばよい。幸田町でも、解説の内容を吟味してほしい。
・（委員）多言語対応について、責任をもって英語で解説を書くのは大変なことだ。日本語できっちり言いたいことが分かるもので、字数の少ない解説にしたほうがよい。

6. 「第２章　事業活動計画　４．教育、５．普及」について

・（委員）「教育」と「普及」で項が分かれているが、あえて教育と普及を分ける必要があるのか。厳密には異なるが、「教育・普及」でまとめ、個人に対するアプローチ「教育」と、地域をはじめ全体に分かってもらうための活動「普及」とする程度でよいと思う。ボリュームが増えるのでもう少し抑えてもよい。
・（委員）子どもたちは、博物館にタブレットを持ってくる。また、学校でタブレットを利用して事前学習することも考えられる。そのためにはオンライン・コンテンツを用意する必要がある。
・（委員）学習体験イベントについて、ヒシの実の調理法等、食に関係するような体験もよい。

7. 「第２章　事業活動計画」６．利用者サービスについて

・（委員）何のために交流するのか、交流することで何をさせるのか、何を交流というのかを明確にすべきだ。
・（委員）「学習等に使用できる座席の提供」はギャラリー機能より難しいのではないか。博物館とは性質が異なるように思う。
・（委員）最近は、公共の様々な場所に小中高生の居場所を提供している。他自治体では、公園のなかに人が集まるスペースがあり、それが移住を促すための施策にもなっている。
・（委員）学習等に使用できるスペースは必要であるが、あくまでも博物館であることが重要である。

8. 「第３章　展示計画」２．常設展示について

・（委員）全体的に展示の内容はとても素敵だ。「楽しむ」、「理解する」、「感動する」、「創出する」の４つのフェーズがよいと感じている。これらを展示にきちんと位置づけられるとよい。それぞれの展示が、どのフェーズに繋がるのかを分かりやすく示されるとよい。「好奇心のスイッチを入れる展示」はどのコーナーに該当するのか。
・（委員）「好奇心のスイッチを入れる」というのは、どの場面でも必要な要素だから、学芸員として常に考える必要がある。ただ知識を授けることで喜んでくれる人もいるが、博物館でモノを見せるというのは、人々の好奇心のスイッチを入れて、次への興味・関心に繋げていくものだ。それができるようになれば博物館として大成功だ。いかにうまく好奇心のスイッチを押させるかを考えるべきだ。一つのコーナーに限定するのではなく、すべてのコーナーで必要だ。そうでないと、分かったつもりだけで帰ってしまうことになる。たとえば、美術館の場合なら、ピカソについて「なんでこれがアートなのだろう」と考えさせるものが必要だ。好奇心をもつことを来館者に押し付けるのではなく、おのずと好奇心を抱いてもらえるような機会を提供しなければならない。難しいが、めざすところはそこになるだろう。いちど知れば、自分で学びを

深めていくだろうし、何度でも来てくれるだろう。

・ （委員）博物館に行くと青塚古墳や本光寺に行きたくなるなど、ほかの場所への繋がりがある展示になっているとよい。

9. 「第３章　展示計画」３．企画展示について

・ （委員）企画展示は様々考えられる。近隣市では工場の展示等もあった。幸田でも工場の企画展を展開できれば、企業との関係も深められる。

・ （委員）毎年でなくてもよいが、1 月 13 日は三河地震を記念した、防災にかかわる展示を企画展示室で行うのもよいと思う。ほかの機関との連携も考えられる。減災館では伊勢湾台風に関する展示を開催している。

・ （委員）蒲郡から幸田のどこかで三河地震を取り上げる拠点となる館は必要だ。

・ （委員）せっかく天然記念物の深溝断層が残っているのだから、うまく利用できるとよい。被害の痕跡は残らない。そういう意味で断層は貴重である。

・ （委員）三河地震の被害の痕跡等にも結び付けた、防災に関する展示等も取り入れると、一回きりしか来ないということは避けられるのではないか。

10. 「第３章　展示計画」リピーター創出について

・ （委員）何度でも来る博物館であることは大事だ。学校団体だけが来る博物館になってしまうのはもったいない。博物館に来るたびに新しい好奇心のスイッチが入るようにするための工夫が必要である。

・ （委員）初めて来た人が面白いと感じ、期待を持って再び来てくれた時にがっかりさせてしまったら、それで終わりだ。再び来て、また好奇心のスイッチが押されるような体験ができた子どもはファンになってくれるだろう。大人の場合でも、本人は忙しくて行けないとしても、ほかの人に薦めてもらえるような博物館にしたい。そのためには、2 回連続して面白いと感じてもらえる体験の提供が必要である。

・ （委員）すごいと思わせるもの一つ作って、それをずっと見せつづけても、行き詰ってしまう。どういうコンセプトで、どういうテーマを続けていくかという視点で、向こう数回の企画を検討する必要がある。そのためには、各回お金がかかりすぎないようにするのがよい。デジタル展示はお金がかかりすぎるうえ、陳腐化しやすい。デジタルでやるなら、コンテンツを変えられるようにしておくとよい。手作りでもよいので、安くて中身があるものを何度もやっていくと、人が来るだろう。一方、どうしても見せたいモノがあれば、それはいつも見せてもいいと思う。

・ （委員）デジタルを使った展示を多用するのは流行っているが、手作り感のある温かみのある博物館にしても良いのではないか。子どもにも分かりやすい解説で本物をしっかり紹介することを基本にしつつも、何か特色がほしいところだ。手作り感や温かみのある博物館と特色づけるのも一つの方法だと思う。本物を見て学べるようにするのは重要であるが、子どもでも楽しめるように展示のしかたや紹介のしかたを工夫していくといいのではないか。

・ （委員）一度にたくさん見せてしまうと、そこで終わってしまい、次に続かない。ちょっとしたものでも、出会いが関心を持つきっかけになる。どのようにきっかけをつくるかが重要だ。モノの面白さを説明する必要があるが、説明しすぎても、出会いにつながる発見にはならない。難しいところだ。

・ （委員）モノとの出会いは、印象的であることが大事だ。普通の解説なら 200～300 文字くらいのところ、それを 15 文字くらいにエッセンスを圧縮しなければならないので難しい作業だが、そういう出し方のほうが引っかかってくれやすい気がする。普通の解説の場合は個人的な感情を入れないものだが、そこには担当者の感情を込めてもよい。みんな欲しがっているのはそういうものだ。

11. 「第４章　施設整備計画」について

・ （事務局）配布した新聞の切り抜き「あふれる博物館」にあるが、建設当初に確保した収蔵スペー

スも、年月が経つと収蔵品で一杯になってしまう。小さな自治体の博物館ができることには限界がある。限られたスペースでどこまで対応できるのかを考えなければならない。いま収蔵スペースを 600 ㎡としているが、将来的には限界を迎えることを勘案する必要がある。

- （委員長）予算によって、施設の規模は変わってくる。調整を具体化していく過程で、いろいろな問題が生じてくるだろう。幸田町の博物館として、教育部門、交流部門について、諸室諸元表に掲載のスペースが必要かを確認したい。
- （委員）交流部門は、精査すれば減らすことは可能であろう。教育部門は設備等を勘案するとより増える可能性がある。
- （委員）教育部門の多目的室に記載された「40～80 名程度が利用」の根拠が知りたい。
- （事務局）学校の学年ないしクラスの人数を根拠にしている。1 学年 2 クラスを想定している。
- （委員）教室は 1 クラス 70 ㎡程度なので、2 クラス分 150 ㎡程度で良いだろう。
- （委員）管理運営部門の事務室は、もう少し大きくした方がよい。職員には指定管理業者のスタッフもいるだろう。資料を広げて見ることができる、スタジオや写場を兼ねられるような部屋があるとよい。

12. 「第５章　管理運営計画」２．管理運営体制について

- （委員）基本構想で「直営・指定管理者制度併用」を採用した。公設公営が一番良いが、予算面で直営・指定管理者制度併用がいいという話になっている。
- （委員）ハッピネス・ヒル・幸田の指定管理者である幸田町文化振興協会を法人化する方向で、町は動いている。そういった中で、一部を直営にすることはできるのか。全体を指定管理者にお任せするという可能性もあるのか。
- （委員）学芸員は専門職であるため、少なくとも学芸は直営がよい。PFI で運営している施設でも学芸員は直営である。
- （委員）しっかりした事務部門を設け、事務処理をこなしながら指定管理業者ときちんと付き合うという形にしなければならない。
- （委員）学芸員ももちろん事務手続きをするが、やはり事務方のサポートが必要だ。支援スタッフも含めて学芸系が 7 名いるなら、事務方は、３名は必要。
- （委員）館長は直営になるので課長級の人がつき、事務管理のマネージャーとして係長級の人、事務系はもう１人つけた方がよい。事務管理のマネージャーから指定管理者に話を下ろす形にすべきだ。そのようにしないとお金は出すけど口を出せないということになる。指定管理者との関係性構築には注意した方がよい。
- （委員）少なくとも普及部門は直営がよい。学校教育との連携を考えるならば、直営であるべきだ。民間であると、いかにも下請け的な仕事の進め方になってしまって、面白くないものになる。指定管理者にやってもらうのは、施設の管理やショップ・飲食の部分になる。ショップについても、商品開発は学芸とともにやるほうがいいだろう。教育部門も直営にした方がいい。数年がかりの展覧会のプランや、周年事業等、長期的な視点で指定管理者への相談はしにくくなる。企画性のあるところは直営で取り組む方がよい。
- （委員）人件費や運営費にどの程度の予算が付けられるのか。予算によって人員数や運営方式は変わる。幸田町くらいの規模でうまく運営している館に、運営方法を聞く必要がある。直営・指定管理者制度併用の場合は、学芸業務は直営で施設の維持管理は指定管理者ということになるが、財産管理の定義が問題になる。文化財は町の財産だが、公設民営や PFI の場合、財産管理の定義がどちらに行くのかということが問題になっている。

13. 「第５章　管理運営計画」３．利用者とともに成長する運営の仕組みについて

- （委員）無償のボランティアではなく、お金を払ってでもパートで働きたいという地域在住者に加わってもらうほうがよい。減災館の場合、教員は専門性が高すぎて、市民目線でものを見るこ

とが難しいが、パートスタッフは市民と同じ目線になれる。そのような人を意識した人事を考えるのがよい。

- （委員）ボランティアの位置づけを明確にすべきだ。
- （委員）けの事業をやった際、専門家の先生に加え、子どもと同じ目線で活動できながらも、子どもの生活を見守ることができる大人にスタッフとして加わっていただいた。子どもは展示を壊してしまう恐れがある。子どもに展示を触ってもらう場合は、子どもたちと一緒に展示を見る人も必要になる。そのあたりの人員配分も勘案できるとよい。

III. 閉会挨拶

- （教育長）いま幸田町郷土資料館で 70 周年を迎えた幸田町に関する展示を行っている。町外から来てくださる方がいることを知って、うれしかった。１週間前に青塚古墳の現地説明会を実施したところ、町外からも多くの参加があり、たいへんうれしかった。副葬品を多くの方にきちんと見ていただき、その歴史的価値を知ってもらうためには博物館が必要であると感じた。幸田町に興味を持って訪れる方々の期待に応えられるような博物館をつくっていくことを目標として、少しでも前進できるよう、これからもお知恵を拝借したい。